

陳舜臣さんを語る会通信

NO.68

May. 2022

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2022年5月10日

1960年代刊行の推理小説を2作『弓の部屋』『他人の鍵』

本号では『弓の部屋』と『他人の鍵』を取り上げます。『弓の部屋』は、『枯草の根』『三色の家』に次いで執筆です。『弓の部屋』は書き下ろしで、『他人の鍵』は別冊文藝春秋108号(1969)が初出です。両者に共通するのは、神戸の北野町、山本通一帯が舞台になっていることです。

まず『弓の部屋』です。手もとにある東都書房版『弓の部屋』(1962)に、陳舜臣さんの興味深い「あとがき」が付いています。下に、これを紹介いたします。(編集委員 橘雄三)

小見出しは編集委員の加筆

◆異人館の墓碑銘を書こうと

明治時代に建てられた、神戸のいわゆる異人館は、いま滅亡に瀕している。空襲でかなり焼失したうえ、残存のものも建物が老朽化し、様式も近代生活にマッチしなくなつたので、所有者がとりこわすのである。由緒ある建物が、あいついで風呂屋のたきつけとなる悲運に遭遇した。最近、関係者のあいだに保存運動がおこり、代表的な二つの異人館が、公費で移転保存されることになった。辛うじて風呂屋のカマにはいるのを免れたとはいえ、所詮、記念物として保存されるだけで、現役をしりぞいたのである。異人館の「ミイラ」といつてよいだろう。

著名な異人館は、ほとんどが北野町界隈にあって、私は朝夕親しんだものである。そんなことで、私はその墓碑銘を書こうと思ひ立つた。

◆題名「異人館」↓「弓の部屋」

この作品は、最初「異人館」という題をつけるつもりだった。意図は壮であったが、その雰囲気要充分伝えることはできなかった。それで、異人館の一部分、「ボウ・ルーム」をとって、「弓の部屋」と題をあらためたのである。不本意であったが、筆力及ばず、鼎をあげえなかつたのだから、しょうがない。



玄関の真上に、半円形に出張った弓の部屋/イメージ
詳しくは2面参照

◆躓き多く難産

これが私の三作目の長編である。これまでの二作は、比較的すらすらとかけたのに、こんどは躓きが多かった。はじめに考えたメイン・トリックに欠陥があって、それを思い切つて放棄すると、構成を全面的にかえねばならなくなった。なんども組み立てては解体しているうちに、推理小説を解剖学的に勉強させてもらった。疑問がつきつきと湧きおこり、ついには一時書くのをやめ、メモと鉛筆を用意して、内外の古典を読み返したり、あれこれと考えたものだ。それによつて、推理小説に坎するいろんな問題を、再検討する機会を与えられた。思わぬ収穫だったと思う。

それにしても、体重がどんどん減るばかりで、筆硯は塵に封じられ、肝心の原稿の枚数はいつまでたつても増えない。業を煮やした東都書房の原田裕氏が、鞭をたずさえて、長驅神戸へ督促にのりこまれるという一幕もあった。

◆体重45キロに戻りホツとする

原稿を届けて十日のち、いまこの「あとがき」を書いている。体重が四十五キロを越えたのを発見して、ホツとしたところである。四十キロを割れば、小説を書かないと妻に約束してあったのだ。

異人館の墓碑銘は、想を練りなおして、あらためて書きたいと思う。

東都書房版表紙



『弓の部屋』登場人物 & 内容紹介ほか

『弓の部屋』導入

夏の夜の神戸を彩る生田神社の花火。それを、異人館のボウ・ルーム(弓の部屋)から眺める男女の間で、突如、殺人が…。被害者は、メイド・光子の夫の山中賢三。警察の調べでは、青酸カリが入ったコカコーラによる毒殺。捜査の進展につれ、居合わせた人々の過去が、次々にあばかれて…。神戸情緒あふれる、本格ミステリー。

主な登場人物紹介

山中賢三毒殺事件の現場にいた9人。

● 桐村道子 「私」。主人公で、語り手。英系船会社インターナショナル・オーシャン・ライン社神戸支店勤務。父は戦死、母は小6の時に病死、それから高校を出るまでの六年間、叔父に育てられた。中学生の頃、不良の群れに投じたこともあった。古くから親しくしている人に縁談を持ち込まれ、渋沢徹治とつき合うようになる。

● ミセス・ラム(ラム夫人) 新任支配人夫人、37歳。8歳まで神戸にいた。祖父は1870年代に来日、当時、日本でも名前を知られた建築技師アーサー・ブラウン

● 渋沢徹治 大学の助教授。専攻は建築史。「異人館」調査を目的に、半年の予定で千葉から来神。親友江本警部に頼りにされ、事件の解決に大きな役割を演じる。

● 織田順太郎 桐村道子の母方の叔父。布引町に住む画家。『北野町の主』と自称。肺結核を患う。福住ハルを「三十年前の恋人や」と言う

● 福住ハル 50歳くらい。昔、ブラウン家の女中。子供の頃のラム夫人を知っている

● 山添時子 桐村道子の不良少女時代からの友人。灘の酒造家山添家に嫁ぐ

● 山中光子 支配人宿舎の女中。30歳前後

● 山中賢三 支配人宿舎の雑役、便利屋。40歳を少し越えている。山中光子の夫

● 八重子 桐村道子の不良少女時代の友達。友達。クラブ勤め

ボウ・ルーム(弓の部屋)の記述、作品より引用

ラム邸は明治三十年代の異人館である。古い木造洋館だが、ペンキを塗りかえたばかりなので、一向に古びた感じはしない。木造下見板張りのオイル・ペンキ塗りは、神戸の異人館に共通しているが、レンガ化粧積み煙突は、立体感あふれる堂々たるもので、ほかではあまり見られない。

南むきの玄関の真上に、大きなボウ・ルーム様式のベランダがとりつけてある。ボウ・ルーム(弓の部屋)というのは、半円形に出張ったベランダの部屋である。(東都書房版 p.30)

ブラウンさんは、オープン・ベランダの家は造りませんでした。日本では台風などがあつて、ベランダをオープンにすると、すぐにいたんでしまうからです。(同 p.149)



講談社文庫版表紙

■ 建築技師アーサー・ブラウンにモデルはあるか？

ラム夫人の祖父、アーサー・ブラウンにモデルはあるのでしょうか。1870年代に来日、それも神戸で活躍したイギリス人建築技師で英国王室建築士会の特別会員(F. R. I. B. A.)の資格を持つ人物という条件が決め手です。『外国人居留地と神戸』(神戸新聞総合出版センター 2013)に、当時日本で、F. R. I. B. A.を持っていたのはジョサイア・コンドルとアレクサンダー・ネルソン・ハンセルの二人であったとあります。この内、神戸の異人館建築ということになればハンセルですが、「1870年代に来日」ということになるとコンドルになります。結論は、二人を足して2で割った人物ということでしょうか？

現在、山本通3丁目に、1896年に、ハンセルが自邸として建てた住宅(現、シュウエケ邸)が残っています。玄関は北側、道路側にありますが、南側には、

広い庭に向かって開放的なベランダが設けられています(下の画像)。この建物は、オープン・ベランダで、それも、角ばったベイ・ルーム(湾の部屋)になっていて、「弓の部屋」の記述と異なります。しかし、立派なレンガ積みの煙突は付いています。どう解釈すべきでしょうか。



kobe.peach21.org/kitano-sueke.html より

『他人の鍵』内容、登場人物 陳舜臣さん、織雅、隆夫、アリー、張彰仁はほぼ同い年

『他人の鍵』の初出は別冊文藝春秋108号(1969)です。単行本は1969年に文藝春秋社から、また、1977年、文春文庫としても出版されています。下枠引用頁は文春文庫版による。(編集委員 橘雄三)

『他人の鍵』導入

昭和二十一年秋、神戸の北野町。清原織雅はコートのポケットにピストルをしのぼせ、小谷精造からもらってある鍵で、小谷邸に入ります。そして、寝室で見たのは、血にまみれ、ベッドに倒れている小谷の死体でした。このような場面からストーリーは始まります。また、「小谷精造との情事は、たいてい自宅を避けることにしていた」という記述から二人の関係がわかります。

外人長屋

外人長屋。織雅たちの住居を、人びとはそう呼んでいた。その外人長屋のある一画だけは、奇跡のように、爆撃からまぬがれた。

木造モルタル二階建の無愛想な洋館である。かなり大きな建物にみえるが、入口が三つあった。その三つの入口の横に直接二階に通じる階段がそれぞれついていた。つまり建物は横に三つ、そして上下にも分割されているわけだ。(p. 12及び14)

主な登場人物(外人長屋の表も併せて見て下さい)

●清原織雅(おりが) ヒロイン、22歳。占領軍民政部の事務員兼通訳。生まれながらの美貌。運命の女神がつねに自分に微笑みかけると信じて生きている。父は昔、ハルビンで会社勤めをしていたときに白系ロシア人と結婚。織雅はいま住んでいる北野町の外人長屋で生まれた。織雅が小4の時に父が病死。父の死後2年して東京へ引っ越し、5年ほどして、母子またもとの外人長屋に戻ってくる。母は戦時中に病死

外人長屋住人			
	西	中	東
二階	ポルトガル人ピアノ教師(アルナルド・モッタ)と息子マルスケ(マルセリーノ・モッタ)	終戦後に入居した白系ロシア人家族。老夫婦と30歳に近い息子、その妹	ラシャの行商をしているトルコタタル人と息子アリー・バヤル、その妹ファティマ
一階	広東料理コック夫婦と息子張彰仁、その弟、妹、居候の彭増嘉	管理人友島あき子と息子隆夫(小谷事件の二日後に復員)	清原織雅 この部屋で生まれる

■ホテルに泊まったり契約をしたりするとき、カードや書類に国籍を書く欄がある。そんなとき、外人長屋の住人アリーの父は、**stateless** と書く悲哀をいやというほど味わってきた。子や孫にはこんな思いをさせたくないと、このような境遇から逃れるすべをいつも考えている。(p. 69、119)

●小谷精造 神戸の北野町に邸宅を構える富豪。娘、女中と暮らす。大学生の息子は東京暮らし。冒頭、自邸のベッドで死体で発見される。二十数年前の小谷邸での女中首つり事件が、この事件に絡んできるとする。

●真津子 神戸の外人邸の女中。五島出身

●荒田三郎 敏腕の警官。隆夫や織雅とは幼馴染み

●リチャード・オウエン中尉 占領軍民政部所属のアメリカ人。父親は大農園を経営

■「外人長屋」イメージ
4travel.jpから転載・引用させていただきます

正面、北野遊歩道沿いにある「仏蘭西館」です。この建物は日本の長屋風であることから洋館長屋と呼ばれています。2軒の家がつながっている左右対称の外国人向けアパートとして、旧居留地から移築されました。



■文春文庫版表紙



『他人の鍵』 移民2世の青春の陰翳^{いんえい}

2022年3月12日付神戸新聞(夕刊)から抜粋・転載させていただきました。「アジール(避難所)」としての海港都市という視点から神戸を見、『他人の鍵』を取り上げています。(編集委員 橘雄三)

風景を読む まちかど文化遺産紀行 23

「アジール(避難所)」としての海港都市【三ノ宮・元町界隈】

神戸大人文学研究科教授 樋口大祐



描き出
している
るので
ある。

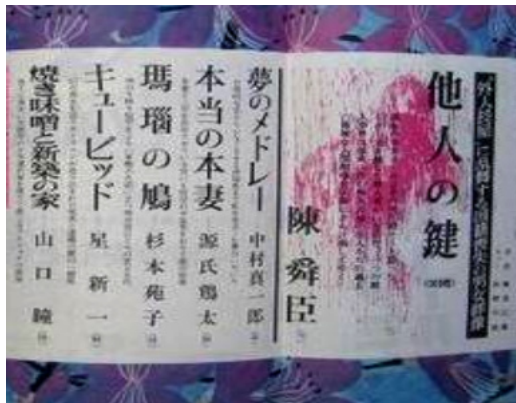
60年代に書かれた陳舜臣「他人の鍵」には、かつてこの地域に少なくなかった貧しい外国人家族が登場する。北野天神下の「外人長屋」で、白系ロシア人の母に育てられた若い女性・清原織雅は、日本人の豪商の愛人になって戦時下を生き延びるが、戦後、自身の運命を開くために進駐軍の青年を誘惑し、邪魔になった豪商を殺すためにその邸に忍び込む。小説は「外人長屋」に住む織雅の幼なじみたちの視点を通して進行する。広東料理のcockの息子、ポルトガル人ピアノ教師の息子、ラシャの行商をしているトルコタール人一家の兄妹、そして管理人である五島出身の单身女性の息子。ルーツの異なる幼なじみたちは「自分たちがまわりから支えられずに、浮き上がった存在である」と感じつつ、ぎこちない神戸弁を駆使して生きている。「他人の鍵」は観光地に変貌する以前の北野を舞台に、移民2世の青春の陰翳を印象深く

■初出は『別冊文藝春秋』108号

『他人の鍵』の初出は『別冊文藝春秋』108号(昭和四四年六月)です。



長編の推理小説が一举に全文掲載されているのです。すごいですね。表紙にも、題名と陳舜臣の名が出ています。



目次でも別格扱いです。

■「他人の鍵」題名について

陳舜臣さんは、当然その都度、熟考の末に付けられるのだろうけれど、読者にとっては難解な題名が結構多い。『枯草の根』のように、作品中に説明がある場合もあります。では『他人の鍵』はどうでしょうか。題名との関係を臭わせているような記述をいくつかあげましょう。織雅がコートにポケットにコルトをしのばせ、小谷邸に侵入するくだりです。

邸内のおもな戸口の鍵を、彼女は小谷からもらって持っていた。(文春文庫版 p. 8)

織雅が、五島へ行く友島あき子から自宅の鍵を預かる場面です。

「また五島へ行ってきますよ。しばらく留守にしますから、ちよくちよく家をのぞいてくださいね。…」と言って鍵を渡したのである。

(どうもあたしはよく他人の鍵を預かる)

(同 p. 36)

これ以上書くとネタバレになるので、場面は省略し該当する文章だけをあげます。

彼女(*織雅ではない)はその三本の鍵を錠前屋へもって行って、合鍵をつくらせておいた。

(同 p. 195 *は編集委員)

やはり、誰も〇〇の胸にかかった鍵を、あけることはできないのである。

(同 p. 225 ○〇と字を伏せたのは編集委員の加筆)

「他人の鍵」というのは、他人の家の鍵とか具体的なもの以上に、何か抽象的なものを開く鍵という意味をも含んでいるような気がします。どうでしょうか。